

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 25 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370939

研究課題名(和文)ポスト社会主義国における経営主体のアントレプレナーシップに関する文化人類学的研究

研究課題名(英文)Anthropology of Entrepreneurship in Post-Socialist Countries

研究代表者

後藤 正憲 (GOTO, Masanori)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・博士研究員

研究者番号：70435949

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀末に経済体制の転換を遂げた国々では、よくアントレプレナーシップを發揮する起業家の存在が経済体制移行の一つの目安とみなされる。しかし、実際に経済活動が行われる場面では、社会的枠組みのあり方やその中で結ばれる行為者同士の関係性が、アントレプレナーシップの発動に大きく関わっている。本研究を通して、アントレプレナーシップは経済の合理化に収束するための要因としてではなく、関係性の変化に応じてその都度構成し直される経済行為の軸となるもの、常に新たな関係の創出に向けて開かれるものとして捉えられることがみいだされた。

研究成果の概要(英文)：There is a general understanding that the entrepreneurship means a personal skill or endowments of business management in the market sphere. Especially in post-Socialist countries the emergence of entrepreneurs is regarded as a yardstick to measure the transitional process of economic structure. However, in actual economic practice, the social frame or the relationship between actors are closely related with the realization of entrepreneurship. The finding of this research is that the entrepreneurship is not a catalyst of economic rationalization, but rather an axis of economic activities that repeat making and resetting of relations of actors, and that are opened to make new relations with others.

研究分野：文化人類学

キーワード：アントレプレナーシップ ポスト社会主義 農業 牧畜 文化人類学 ロシア モンゴル

## 1. 研究開始当初の背景

ロシアや中東欧諸国、モンゴル等のポスト社会主義国を対象とする人文社会系の研究分野では、経済活動を行う主体のアントレプレナーシップ (entrepreneurship) に着目する研究が多く見られた。元来、日本語で「起業家精神」と訳されるこの言葉は、欧米の経済学者によって経済理論の基軸に組み込まれてきた概念で、有効な機会を利用して自らの利益につなげる個人の行動が、社会的イノベーションの契機となって経済発展もたらすと理解されてきた。1980年代には経済人類学の分野において、この西欧起源の概念をいわゆる第三世界で行われている営みにも適用して、その現実を捉え直そうとする試みがなされた。近年、ポスト社会主義諸国の現象について指摘される場合では、経済の急速な資本主義化が進み、財産所有や生産手段の個人化が推し進められる中で、それまで強力な権力を持つ国家のもとで抑えられていた個人の主体的な営み (エージェンシー) が効力を発揮する状況を捉えて、アントレプレナーシップの概念が起用されている。

一方、実際に経済活動が行われる個々の事象に着目すると、行為者を取り巻く社会的な枠組みや、その中で結ばれる行為者間の流動的な関係が、アントレプレナーシップの発動に大きく関わっていることが分かる。つまりそれは、起業家個人の内面 (「精神」) にとどまるものではなく、起業家と環境世界の相互作用の連鎖の中で捉えられる普遍的な現象であり、同時にその場の特定の状況から生み出されるローカルな特殊性を具えたものでもある。こうしたことから、アントレプレナーシップを資本主義経済の指標とする見方や、経済活動を行う行為者の個人的な資質に還元する見方に対抗して、それが社会生活における様々な関係性に基づいて形成される状況を、起業的な活動の個々の現場から照らし出そうとすることが、本研究の動機となっている。

## 2. 研究の目的

本研究では、アントレプレナーシップを文字通り起業する人に限定するのではなく、経済活動を通して身の回りの現実を変えていこうと企てる行為者の創造性という意味で、通常より広く捉えることにした。その上で、アントレプレナーシップにまつわる営みの歴史的变化と持続性、親族をはじめとする社会的ネットワーク形成や、世界的な規模の政治経済との関連性に着目しながら、ポスト社会主義世界の文脈におけるアントレプレナーシップの特殊性と普遍性を検証することを目的として、本研究は始動した。

特定の社会的コンテクストにおいてアントレプレナーが果たす役割を見据える本研究は、アントレプレナーシップが社会経済的にどのような意味を持つのかということよりも、実際にアントレプレナーたちがどのよ

うな活動を行っているのかということに焦点を合わせる。刻々と変化する社会的局面において、アントレプレナーはどのような決定を下すのか、そこで実際に何をするのかを明らかにすることによって、アントレプレナーシップの創発する契機を捉えることが、本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

アントレプレナーシップという一見捉えどころのない概念にアプローチを図るために、次の三つの対立軸を設定して、その位置づけを明らかにする方法をとった。

### (1) 持続と変化

アントレプレナーが経済活動を行う上では、多くの局面で状況的な判断が求められる。ある程度リスクを伴いながら判断を下すことが必要とされる場合、それぞれの活動主体はどのような兆候を好機とみなして行動に移す (変化を選ぶ) のか、あるいは行動に出るのを踏みとどまる (持続を選ぶ) のか。また、そうした個々の判断が、社会的な状況の変化とどのように連動しているのかについて考察する。

### (2) 社会と個々の主体

今日ではかつて国家や地方の党組織が担っていた強力な基盤が後退し、代わって親族や家族のネットワークが経済活動のなかで大きな役割を果たすようになってきている。個々の主体は、こうしたネットワークの中で行動のタイミングを計り、活動を組織する能力が必要とされる。その中でアントレプレナーたちの活動においては、公的領域と私的領域の性質がそれぞれどのように捉えられ、どのような関係を形作るのかを明らかにする。

### (3) マクロな枠組みとミクロの事象

新しいテクノロジーの開発や情報の拡散など、国家の枠組みを超えて広がるグローバル化の傾向、あるいは国家間の戦争や制裁といった国際関係の動向、また地球温暖化やその他の環境異変などエコロジカルな現象、これらのマクロな枠組みで起こっている事柄は、それぞれの主体の日常的生活における関心事 (ミクロな事象) に対して、どのような影響を及ぼすのか。また反対に、日常のミクロな事象が、より大きなマクロの世界に何らかの影響を与えるのか。本研究ではアントレプレナーの営みに対して、マクロな枠組みとミクロな事象の双方からアプローチする。

これら三つの対立軸を共通の座標軸として、研究代表者と分担者が、それぞれロシアとモンゴルでフィールドワークを行って集めたデータを分析した。

調査はそれぞれ二か所以上の地点で敢行し、比較可能な領域を広く設定するよう努めた。研究代表者の後藤は、ロシアのチュヴァシ共和国とサハ共和国でそれぞれ調査を行った。前者はモスクワの大消費地に近い沿ヴォルガ地域に位置し、穀物生産を中心とする

農業が盛んな地域である。それに対して後者は極寒の東シベリアに位置し、主に牛や馬の牧畜が生業とされている。産業形態の異なる二つの地域で、農場経営のあり方にどのような違いが生じているかを調べた。一方、分担者の辛嶋は、モンゴル国東部のヘンティイ県、中部バヤンホンゴル県、および首都のウランバートル市内で調査を行った。地方の牧畜地域と中心都市を交互に調査することによって、商品の流通や人の動きを通して、草原と都市の間でどのようなネットワークが築かれているのかを調べた。

さらに、連携研究者による中央アジアの事例や、二度にわたる研究会の開催を通じて紹介されたアフリカやオセアニア、南アジアの事例も合わせて比較分析を推し進めることによって、研究の課題に取り組んだ。

#### 4. 研究成果

ソ連時代に作られた集団農場や国営農場が解体され、農業の再編が進んだ結果、今日ロシアでは農場経営のあり方に三つのカテゴリーが見られるようになった。一つは、かつての集団型の農場を引き継ぐ形で存続する組織経営によるもの。生産者協同組合からアグロ・ホールディングに至るまで、組織的な農業企業がこれにあたる。他方、フェルメルと呼ばれる個人が農場を登記することによって経営を行う個人経営と、登記を行わないで副業的に農業を行う住民経営がある。一般的な見方によると、個人（フェルメル）による農場経営においてもっともアントレプレナーシップが発揮されると想像されるが、実際には経営のカテゴリーの違いによる相違はそれほど認められなかった。経営のカテゴリーの違いによって、それぞれ生産の規模は異なるものの、土地や機械へのアクセス、補助金の受給や納税義務による行政との関わり、国家が受ける経済制裁の影響等においては、いずれも同等の条件下に置かれている。組織による農場経営者も、個人の農場経営者も、複雑に交差する要因の間に利益を生み出すチャンネルを見出そうとする点で共通している。このことから、アントレプレナーシップはどこか特定の要因に指摘されるものではなく、互いに関係性を持つ諸要因の配置にこそ見いだされるものであることが分かった。

一方、モンゴルでは世帯ごとに牧畜経営が営まれている。羊やヤギを中心とする家畜は、経営の資本として、主に未子相続によって世襲される。近年では都市に定住する牧民が増えたため、草原で家畜の放牧を引き受けて管理を行う牧夫の存在が不可欠になっている。牧夫は、家畜所有者の親族であったりそうではなかったりするが、いずれにしても牧夫として働きながら資金をためて、結婚すれば自ら世帯主となり、ゆくゆくは自立した経営体を築く可能性を持つ。牧夫が資金をためる方法としては、労働の報酬あるいは結婚の祝儀と

して家畜の分与を受けること、また家畜の生殖による再生産、あるいはヤギから得られるカシミアの原毛を市場で売ることがあげられる。このなかで、家畜の分与は所有者との既存のネットワークにおいて得られるが、家畜の再生産は技術と運の混じりあったものとしか言いようのないものであり、カシミアの売却は親族のネットワークを超えた市場の原理に沿うものである。このように、既存のネットワークを起点としながら、それを越えたところと関わりつつ、さらに結婚を通じて新たなネットワークを構築する牧畜民型のアントレプレナーシップのあり方を確認することができた。

以上の調査から得られた概要を集成すると、次のようにまとめることができる。

##### (1) 関係性の配置と経路

アントレプレナーとしての行為者は、経済活動における人やモノの動きに関して既存のネットワークをたどりながらも、それとは異なるチャンネルを開くことで利益を得る。人とモノの関係性を巧みに利用しつつ、それらが自らの営為にとって有利な配置となるように新たな経路を開くことが、アントレプレナーのもっとも顕著な働きとして指摘される。

アントレプレナーによるこうした働きは、確かに行為者個人の才覚によるものでもあるが、それ以前に人とモノの社会的な配置がなければ生まれてこないものである。特定状況におけるアントレプレナーシップの発現を捉える上では、点と点を結ぶ線、すなわち行為者とその関係性の配置を視野に入れる必要がある。

##### (2) 諸価値の差異と通約可能性

既存のネットワークに沿って経済行為が営まれている間は、行為者にとりたてて大きな利益がもたらされることはない。取引の行われる関係は安定的で、従事者間で取引されるものに見出される価値のギャップは小さい。ところが、人とモノの配置が変わることによって、取引されるものに見出される諸価値の差異が大きくなる局面で、アントレプレナーは新たな経路を見出すものと考えられる。

もともと価値の異なるものの間では取引が成立しにくく、それが行われるまではほとんど関係を持たない状態に置かれている。アントレプレナーが取引の新たな経路を開くとき、それまで隔離されて通約不可能だったもの間に通約可能性が見出されることで、両者の間がつながれる。この際、取引されるものが持つ価値のギャップが大きいほど、そこに発動されるアントレプレナーシップは顕著なものになる。

##### (3) 偶然性の作用

アントレプレナーが新たな取引の経路を切り開く際に、かなりの程度で偶然性が作用していることが分かった。新たな商品やサー

ビス、生産方法、流通や市場のネットワークが開発される上では、意図せずして得られた結果がその後の取引につながるケースが多く見られた。このことは、アントレプレナーシップは必ずしも個人の才覚にのみ見出せるようなものではなく、偶然性に左右されるような不安定な外部をも含んだものであることを示している。取引の可能性が偶然に得られることによって、最初は不安定でしかなかった機会を安定的な経路に制度化していく作用も、アントレプレナーの重要な要素の一つとなる。

#### (4) マクロな枠組み

偶発的な出来事とならんで、国家や国境、政治情勢や自然環境の変化といった動かしがたい要因も、アントレプレナーの活動と大きく関わっている。ローカルな事象を取り囲むこうしたグローバルな要因は、取引が行われる際に大きな制約となる。しかし、こうした制約は、いわゆるゲーム理論における「強制された選択」を準備するもので、アントレプレナーは所与の制約に基づいて選択を行い、取引の経路を開発していく。そのなかで、マクロな枠組みは外側からアントレプレナーの活動を統御するのではなく、アントレプレナーシップの内部に取り込まれることになる。このことから、マクロな枠組みとミクロの事象は対立的に存在するのではなく、相互に浸透するように成り立っていると言える。

#### (5) 創出に向けて開かれるもの

アントレプレナーは、(2) 取引されるもの間に価値のギャップを見出して、それらを通約可能なものに変えたり、(3) 偶然にしか得られない不安定な状況を安定的な経路に制度化したり、(4) 取引の微細な手続きにあるようなミクロの事象にマクロな枠組みを継ぎ足したりすることで、ある意味で文化の統合化を行っていると言える。

しかし、文化の統合化にせよ、経済の合理化にせよ、アントレプレナーシップの帰結は一つの状態への収束にあるのではない。むしろ、(1) で示したような一つの関係性の配置から新たな経路を開くという重要な性質が示しているように、アントレプレナーは既存のネットワークをたどりながらも、常に新たな創出に向けて外側に開かれている。

以上のように、社会的な生成のプロセスからアントレプレナーシップを捉える着眼点を示すことができたことが、本研究の大きな成果である。期間中に研究組織を超えて行った研究会では、旧社会主義圏以外の地域を対象とする研究者も交えて議論することで、より有益な効果が得られた。今後はより広いエリアからアントレプレナーシップの人類学的研究にアプローチする試みにつなげていきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

幸嶋博善、拡張する柔軟性—モンゴル国現代牧畜社会における居住単位のサイズと構成の変遷、文化人類学、第81巻1号、査読有、2016年、44-61

後藤正憲、モノと場所の領域化—チュヴァシの在来信仰における空間の位相、北方人文研究、査読有、第9号、2016年、39-57

<http://hdl.handle.net/2115/61290>

地田徹朗、アラル海災害の顕在化と小アラル海漁業への初期対応策、アジア生態危機と持続可能性—フィールドからのサステナビリティ論(大塚健司編)、アジア経済研究所、査読無、2015年、191-236

[学会発表](計30件)

幸嶋博善、『遊』動するくらし、武庫川女子大学生活美学研究所定例研究会、2016年10月29日、武庫川女子大学学術研究交流館(兵庫県西宮市)

Hiroyuki Karashima, Collision and "The point of compromise" in a Mongolian pastoralists' society. The 11th International Congress of Mongolists, 2016年8月16日、モンゴル教育大学(ウランバートル、モンゴル)

Masanori Goto, Cutting through Channels: Local Entrepreneurship of Indigenous Actors in Arctic Russia. Slavic-Eurasian Research Center 2016 Summer International Symposium "Russia's Far North: The Contested Frontier," 2016年7月7日、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター(北海道札幌市)

Masanori Goto, Co-operatives and Private Farmers in Reorganization of Agriculture in the Chuvash Republic, Russia. International Research Conference, New Strategies for Co-operatives, International Co-operative Alliance, 2016年5月26日、ホテルバルセロ・カボ・デ・ガタ(アルメリア、スペイン)

幸嶋博善、近年における牧畜社会の居住単位の規模と構成の変化について、日本モンゴル学会2015年度秋季大会、2015年11月21日、国立民族学博物館(大阪府吹田市)

Masanori Goto, Post-Socialist Entrepreneurship in Rural Chuvash in Russia. ICCEES IX World Congress in Makhuri, 2015年8月8日、神田外国語大学(千葉県千葉市)

幸嶋博善、どこの誰が家畜管理を担うのか?—モンゴル国東部牧畜社会における居住単位と家畜管理に見る牧畜戦略、第49回日本文化人類学会、2015年5月29日、大阪国際交流センター(大阪府大阪市)

Masanori Goto, Entrepreneurial Support and Local Community around the Resource Development in Arctic Russia. Fourth International Symposium on the Arctic Research, 2015年4月28日、富山国際会議場(富山県

富山市)

Masanori Goto, Entrepreneurship of Economic Actors in Chuvash Village in Russia. Conference "Changing Patterns of Power in Historical and Modern Central and Inner Asia", 2014年8月9日、ウランバートル大学(ウランバートル、モンゴル)

Hiroyoshi Karashima, How to sell products: a case study on market economy for Mongolian pastoralists. Conference "Changing Patterns of Power in Historical and Modern Central and Inner Asia", 2014年8月9日、ウランバートル大学(ウランバートル、モンゴル)

Tetsuro Chida, The Revival of the Small Aral Sea and Fishery. Conference "Changing Patterns of Power in Historical and Modern Central and Inner Asia", 2014年8月9日、ウランバートル大学(ウランバートル、モンゴル)

〔図書〕(計1件)

Shinichiro Tabata, Veli-Pekka Tynkkynen, Daria Gritsenko, Masanori Goto, eds., Russia's Far North: The Contested Energy Frontier. Routledge. (forthcoming)

〔その他〕

第1回アントレプレナーシップ研究会

日時：2016年2月27日(土)

場所：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/seminors/src/pdf/20160227.pdf>

・後藤正憲、チュヴァシの農業再編における協同組合と自営農家

・辛嶋博善、家業と企業の間：モンゴル牧畜民とアントレプレナーシップ

・佐久間寛(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) 首長、組合、モラル：西アフリカ農村社会におけるアントレプレナーシップ

・深田淳太郎(三重大学) 西太平洋の遠洋航海“社”：貝殻交易の歴史と革新から見るアントレプレナーシップ

第2回アントレプレナーシップ研究会

日時：2017年3月21日(火)

場所：北海道大学東京オフィス

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/seminors/src/pdf/2016/170321.pdf>

・中川加奈子(国立民族学博物館) カースト役割から仕事の区分へ?：ネパールの食肉公社設立に見るアントレプレナーシップ

・宗野ふもと(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター) アントレプレナーシップを発動させるウズベキスタンの毛織物

モンゴル国におけるアントレプレナーシップ勉強会、Mongol ba “entrepreneurship”

日時：2017年2月16日

場所：国立民族学博物館(大阪府吹田市)

P. Tserenbazar (ツェレンバザル・モンゴル国立大学社会労働学部講師) Jijig dund biznes erhlegchdiin ediin zasgiin erhiin heregilt (中小のアントレプレナーの経済的権利の実際)

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

後藤 正憲 (GOTO, Masanori)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・博士研究員

研究者番号：70435949

### (2)研究分担者

辛嶋 博善 (KARASHIMA, Hiroyoshi)

国立民族学博物館・北東アジア地域研究国立民族学博物館拠点・拠点研究員

研究者番号：60516805

### (3)連携研究者

地田 徹朗 (CHIDA, Tetsuro)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・助教

研究者番号：10612012

### (4)研究協力者

大石 侑香 (OISHI, Yuka)

日本学術振興会特別研究員(PD)